

## 〈研修報告〉

# Columbia University Libraries での研修を終えて

重 嶋 ま み（利用者支援課）

## 研修の概要と課題

2010年1月5日～3月30日の約3ヶ月間、人事課の研修制度を利用して北米の大学図書館に滞在し、日本の大学図書館の「お手本」でありつづけるその姿を見、聞き、体験した。1、2月は主にNew York州のColumbia University Libraries（以下、コロンビア大図書館）にて業務の細かなやり方、取り組みの背後に存在するニーズやポリシーを学んだ。3月はアイビー・リーグを中心とした6つの大学図書館を訪問するとともに、北米大学図書館のライブラリアンのための会議にも参加することができ、多様な取り組みや大学図書館全体が抱える問題について理解し、肌で感じることができた。

## スタッフの専門性

2ヶ月間滞在したコロンビア大図書館では、そこで働くライブラリアンの専門性の高さと同様さに驚かされた。プロフェッショナル・ライブラリアンと呼ばれるスタッフは、採用の時点ですでに博士号を取得しているほどの専門知識を持っていながら、さらに、大学の授業を履修できる制度を活用したり、オンラインのトレーニングプログラムを受講したりと、恒常的にスキルアップを図る姿が見られた。彼らの高い能力は、特別な研修制度によって築かれているのではなく、日々の自己研鑽の積み重ねによるものであるという事実を知ることができた。

これほどまでにスキルアップを必要とする理由の1つに、日本とは大きく異なる人事制度がある。昇進を望む者は、自分の業績（査読つき学術雑誌への論文掲載、大規模な会議の主催実績、図書館内ワーキンググループでの活躍等）を昇進の審査を行う委員会に提出し、認められた者だけが昇進を許されるという仕組みである。プロフェッショナル・ライブラリアンであっても、この審査なくして給与が増えないという厳しい仕組みが、図書館員の日々の努力を後押ししている一面がある。

しかし、近年の図書館を取り巻く環境の変化に伴い、限定された分野の専門的知識や能力よりも、分野横断的な浅くとも広い知識やコンピュータスキルをライブラリ

アンに求める風潮もあった。北米のライブラリアンもまた、変化のときを迎えているようであった。

## 初年度教育・新入生支援

近年、早稲田大学でも全学的に取り組みを強化しており、北米では以前から盛んに行われている新入生を中心としたリテラシー活動についても、そこに込められた思いに触れることができた。

コロンビア大学では、学部の新入生を対象に“The Core Curriculum”を実施しており、その運営を図書館が一手に引き受けている。Reading, Thinking, Discussingの3つに重点を置いたこのプログラムを通して、新入生は大学生として必要な学習・研究能力を身につける。

受講生は、自分の専門や所属学部が何であるかは関係なく、全員が同じ図書を読むところからこのプログラムをスタートさせる。「世界各地から集まった約1000人の新入生が同じ図書を読み、共通の話題を持つことで、コミュニティーを形成する助けになりたい」と話してくれた学部生支援専門のライブラリアンの、学生に寄り添うような姿勢が非常に印象的であった。



コロンビア大メインキャンパスの中央で24時間開館し  
寮生たちの「勉強部屋」の役目も果たすButler Library

## 顔の見えるサービス

図書館員は何をしているのか、と常に問われる日本と異なり、北米のライブラリアンは「透明性」の意識を非

常に強く持っていると感じた。多くの図書館では、ライブラリアンの名前、連絡先、専門の学問領域等の情報をweb上で公表しており、顔写真まで掲載している場合すらある。書架が並ぶ利用者スペースにライブラリアンのオフィスが設置されており、オフィスアワーに個別相談ができるように整備されていることも珍しくない。所属学生の少ない大学院の図書室のライブラリアンの中には、学生全員の研究テーマを把握し、「役に立ちそうな資料を見つけては連絡しているんだ」と教えてくれた人もいた。

これほどまでの情報公開、1対1のサポート体制に初めは抵抗を感じた。しかし、学生や教員が自分と専門の近いライブラリアンに個別にサポートを求め、それに応え、パートナーとして確固たる関係性を築いている様子を見聞きし、帰国する頃にはその環境をうらやましく思うまでになった。

### 大学の価値を左右する図書館

3月に訪れたマサチューセッツ工科大学(以下、MIT)では図書館を一般開放しており、高額なデータベースや電子ジャーナルの使用を広く一般に認めている環境に驚かされた。「MITの周りにはIT関係の中小企業が多く存在していて、高額な電子資料を利用するためMITの図書館を訪れる人々との間につながりが生まれている。図書館の開放は運営上難しい面もあるが、やめてしまえば彼らは他の場所へ行ってしまうであろう」というライブラリアンの言葉が印象的であった。

コロンビア大図書館では、卒業しても使える電子資料の情報をまとめ、積極的に提供している。大学を卒業し、社会に出て、はじめて大学の学びの環境がいかにも恵まれたものであったかに気がつく卒業生は早稲田でも多いが、気がついたときには使うことができないというジレンマがある。この大学を卒業して良かった、この大学があって良かった、と思わせる力が、図書館や図書館サービスにはあるのだということを実感することができたのは、非常に意義深いことであった。

### 経済不況下での図書館

「経済不況をどう乗り越えるか」という課題は日本のみならず、北米の大学図書館でも議論的となっており、世界中に名前が知られている有名大学ですら急激な環境の変化に苦悩していた。以前は図書館の中心的役割であったはずの「コレクション構築」「資料保存」

という機能を図書館から排除してしまうという耳を疑うような計画をいくつも耳にした。予算の大幅カットは当たり前、その高い専門性が図書館を支えてきたはずのライブラリアンがある日突然大量にクビになるという現実がそこに存在していた。常に北米大学図書館の後姿を追ってきた日本の大学図書館も追随していくのだろうかと不安にならざるを得なかった。

しかし、予算が少ない状況下にあっても、ライブラリアンの創意工夫でお金をかけずに新規サービスを開始したり、システム開発に学生の手を借りて費用を抑えたりする姿も多く見る事ができた。あるライブラリアンの「経済不況を一過性のものと考えず、これからもずっと続くものだ考えるべき」という発言は、経済状況の深刻さとともに、苦しい状況にあっても高いサービスを目指す方向へ考えをシフトさせているライブラリアンの強さも感じさせるものであった。



Harvard Law School Library

3ヶ月の間、本当に多くの出会いがあり、毎日が発見と驚きと感動に満ちていた。私たちの「お手本」北米の大学図書館の実際を学び、それを支える人々の声を具に聞くことができたのは何ものにもかえがたい貴重な経験となった。理想を掲げ、自らの能力向上に努め、広い視野で考えながらも足元から取り組み、挑戦するライブラリアンの姿や彼らの一言一言がどれも強く印象に残っている。言い訳からではなく可能性から考え始めるその姿に感化され、自分自身から変えていきたいと思う。